令和 8 年度　第 1 回舞鶴市図書館協議会 記録（抄録）

日時：令和 8 年 5 月 19 日（火）
午後 3 時 30 分～5 時 00 分
会場：舞鶴市立東図書館　研修室

＜１．議事＞

（１） 開会

（２） 委嘱状交付

（３） 図書館協議会 議事

議題① 会長・副会長の選出

議題② 新たな中央図書館の開館に向けた機運醸成について

議題③ 分館のあり方について

（４） 閉会

＜２．会議録＞

（１） 開会 （午後 3 時 30 分）

（２） 委嘱状交付

（３） 図書館協議会 議事

議題①について事務局より説明し進行。会長選出後は、議題②、③の進行を会長に一任。会議中の質問や意見等は以下のとおり。

①［議題］ 会長・副会長の選出

委員からの推薦により、会長に中川幾郎氏、副会長に常世田良氏を選出。

（会長・副会長より）

・大阪府堺市等の先進的な取り組み事例（すべての基本方針や重要計画を事前に図書館協議会で議論・承認した上で議会に提案するルール）を重視していく。

・本協議会においても事前に徹底的な熟議を重ね、責任を共有した上で新しい図書館づくりを進めていく。

・新たな中央図書館は京都府北部や関西圏でも極めて先進的な図書館となるが、新しい試みには障害や摩擦も生まれる。協議会が防波堤・推進力となり、行政や現場をアピール、バックアップしていく。

②［議題］ 新たな中央図書館の開館に向けた機運醸成について

（中高生サポーターと若い世代の参画について）

・中高生サポーターの取り組みは、若い世代が当事者意識を持って図書館づくりに参画できるため非常に有意義である。
・中学生・高校生がバランスよく参加しており、若者目線での企画や本棚づくりに期待したい。

・生徒たちが学校の枠を超えて活動するにあたり、ボランティア保険等の整備を含め、安心して活動できる環境の保障を徹底してほしい。

（効果的な情報発信と広報・SNS の活用について）

・新たに開設する公式 Instagram では、新刊や休館日の案内といった事務的発信に留まらず、本に関心の薄い人の目にも留まり、ファン層が拡大するような魅力的なコンテンツ（司書のおすすめ本紹介等）を工夫すべき。

・『広報まいづる』の連載は、活字ばかりだと読むハードルが高いため、子どもから大人まで直感的に伝わる「わかりやすい漫画やイラスト」を取り入れた構成するなど工夫してはどうか。

・SNS のフォロワー拡大に向けて、舞鶴在住で発信力のある方を機運醸成に向けたサポーターとして巻き込むことや、スマホ操作が苦手な年配の方へ向けた窓口での Instagram 登録サポートを行うことも有効。

・長年親しまれてきた東・西図書館の閉館にあたっては、感謝を伝えるフィナーレイベントや思い出写真展などを企画し、閉館をネガティブなものではなく新館への架け橋とするセレモニーを行ってはどうか。

・愛称募集やロゴマークの選定にあたっては、個別の図書館だけでなく、舞鶴の図書館ネットワーク全体が一つのパッケージ（ブランド）として愛着を持てるネーミング展開を行うべき。

（ターゲットを絞ったアプローチと課題解決型レファレンスについて）

・新たな図書館の最大のメインターゲットは、現在最も図書館の利用率が低い「30 代～40 代の働き盛り世代」である。
・「お年寄りや子ども、受験生が利用する場所」というこれまでの固定観念を打破し、課題解決の「強力な情報インフラ」としての価値を開館前から強く訴求する必要がある。

・商工関係、医師会、商店街、各種 NPO 等のあらゆる地域団体の会合へ司書・職員が出向き、「皆様が抱える課題を図書館がレファレンスで解決します」とアピールするなど、地道なプロモーション（出前プレゼン）が極めて有効である。

・「おでかけ図書館」では、単に絵本を持っていくのではなく、大人の課題解決に役立つビジネス書や地場産業（農業、漁業など）向けの先端技術資料等を持参する「出前図書館」の視点が必要。
・ブースには実際の「レファレンス成功事例（新商品開発や特許防衛など）」のパネル展示などによりアピールすべき。

・ネット検索（スマートフォン・AI 等）が普及している時代だからこそ、それらを上回る「高度な専門的知見やアドバイス、資料のキュレーション」を提供できるよう、司書や職員のトレーニング（目利き力の育成）を開館までに徹底することが求められる。

（事前登録の推進と開館時の混雑対策について）

・開館と同時に新規登録が殺到すると窓口が大混乱に陥るため、開館 1 年前から、市役所のロビーや商業施設等に「事前登録特設デスク」を設置することや、各公共施設に同一デザインの回収ボックスを置くこと、オンラインでの事前登録を早期稼働させるなどの対策を強く推奨する。

（「舞鶴市文学賞」について）

・舞鶴を舞台にした短編小説やエッセイ、本と図書館にまつわるエピソードなどを全国から募集し、優秀賞を表彰することで、全国への PR や交流人口の拡大、シビックプライドの醸成につなげたい。
・同時に、図書館が暇つぶしのためだけの場所に見えないよう、前述のビジネス支援等の取り組みもセットで打ち出すべき。

③［議題］ 分館のあり方について

（施設内での見守りと地域に応じた特色化について）

・「まなびあむ」では放課後に中高生が多く集まり活気がある一方、危険な場所での鬼ごっこなど安全性やマナー面での懸念もある。

・社会ルールを毅然と指導・見守りできる職員配置が必要である。

・「商工観光センター」は求職者やビジネス関係者が多く出入りするため、ビジネス・就労支援に特化した特色ある構成（起業ノウハウ、資格取得、求人情報等）が極めて有効だと考える。

・さらに、市内で急増する外国籍労働者のための多文化共生や日本語学習サポートの要素も盛り込んではどうか。

・画一的な分館にするのではなく、地域や施設の特性に応じて思い切った特色化（キャラクター付け）をしてはどうか。

（アクセスの保障と専門司書の役割について）

・分館の真の価値は、中央図書館まで足を運べない、あるいは移動手段のない高齢者や子ども、忙しい子育て世代に対する「情報のアクセス（蛇口）」を身近に保障することである。

・分館を単なる本の受け渡し場所にしないために、どのような専門的要望やレファレンスにも対応でき、中央館から本を取り寄せられる司書が最低 1 名は常駐する体制が不可欠だと考える。

・高齢者等が買い物や散歩のついでに立ち寄り、お茶を飲みながら話し合える多世代のハブ（居場所）となる小スペースを分館の内部にも設けるべき。

（建築構造の制約と「選択と集中」について）

・スペースも人員も限られた分館にすべての機能を盛り込もうとすれば中途半端になる。

・「選択と集中（役割分担）」が必要であり、中央図書館は車を運転できる働き盛り世代を主なターゲットにし、分館は子どもやお年寄り、近隣の子育て世代をターゲットにするのが合理的だと考える。

・既存の複合施設内への設置にあたっては、本の重量に対する床荷重（耐荷重制限）に配慮する必要がある。分館に置く冊数は絞り込み、ミニマムで洗練された書棚にしてはどうか。

（中央館とのネットワーク化とスピード・技術補完について）

・分館の蔵書の少なさは「手に入る圧倒的なスピード」で克服できる。午前中に分館でリクエストした本が、午後や翌朝には届くような超高速配送システムを構築すべきである。

・すべての分館に高度なレファレンスに対応できる司書を配置することが厳しいようであれば、分館のカウンターにテレビ電話やタブレットを設置し、中央図書館の高度なレファレンスに対応ができる司書とリアルタイムで直接相談ができるオンライン遠隔相談システム（テレ・レファレンス）を導入するなど、技術的に補完してはどうか。

（移行期のスケジュール調整と空白期間の解消について）

・現在の東図書館が閉館してから新たな東分館が開館するまでに、サービスが使えない空白期間（タイムラグ）が生じることは、住民サービスの観点から絶対に避けるべき。
・地域住民に不利益が生じないよう、スムーズな移行スケジュール調整を強く求める。

（公民館活動との連動・統合による地域課題解決について）

・少子高齢化や一人暮らし高齢者の増加、空き家、災害時の見守りネットワークの構築など、舞鶴が抱える地域コミュニティの課題に対処するため、従来の形骸化した公民館と分館・図書館機能を強力に「連動・統合（相互乗り入れ）」させるべきである。

・地域の課題解決に向けた熟議の場として公民館・分館が機能するよう、個人情報と防災の両立に関する先進事例や、地場産業（農業、漁業など）の課題解決に向けた最先端技術論文等の専門資料を、公民館の勉強会や地域の活動に積極的に情報支援・提供してほしい。

・市民が「社会教育士」や「防災士」などの資格を取得し、自発的に地域課題解決プロジェクトを立ち上げられるよう、スクーリングや資料提供などの「学びのサポート」を積極的に行うべき。

（京都北部地域の広域図書館連携について）

・新たな中央図書館の計画に掲げられている「京都北部 5 市 2 町（京都北部地域）の図書館広域連携」については、舞鶴市がリーダーシップを発揮し、同一の巡回配送車（連絡車）を毎日運行させて相互に本を貸し借りできるようにするなどの共有ネットワークを早期に実現すべきである。

（４）閉会（午後 5 時 00 分）